# 四季録

## この町（宇和島）

生まれ、育ち、暮らす町、宇和島。その変わりゆく光景に悲憤する。

毎日仰ぐ鬼ケ城山は林道で横真っ二つ、山が痩せた。川は無味な水路となり、埋め立ての進む海岸線は豊かなラインを失った。

終着駅。尽きる線路に旅人は心を揺らす。だが、かつての独立駅舎はホテルビルの中。自生もしないヤシの木を並べ偽の顔で迎える。九州を結ぶ海の航路も絶えて久しく、銅鑼とテープで見送ったのは昔の話。

中心部への入り口にあったモダンなロータリーは撤去され、宣伝看板ばかりが騒々しい。とどめを刺したのが高速バイパス。露骨に貫き町のバランスを大きく崩した。こうやってイメージは変えられ、僕の中の秩序も次々と壊れてゆく。

アーケード商店街は、時代の役目を終えた閉鎖的トンネルにも見える。自然を遮断する覆いなど取っ払い、光も雨も受け入れる。樹を植え、やわらかな風を通し、市やオープンカフェもある憩いとにぎわいの解放地、「ロングロード公園」にすればなどと想像する。

市役所や警察署、図書館などは市街に集中していたが、場当たり的に拡散した。暮らしに寄り添った小さな商店も大型店に圧され消えてゆく。1軒の映画館も立ちゆかない文化果つる地になった。

破壊と建設を繰り返してきた歴史。時代の尻馬に乗り、経済や安全を旗印に、車社会の利便性に偏ったインフラや商業施設で取り繕う。マンホールの蓋にまで観光レリーフを施すなど、微細に入り町のデザインは幼児化した。展望を持ったトータルな町づくりなど考えてないのだろう。

多くの作家がこの町の魅力について書いたのも今は昔、無粋な町となり、愛着や誇りがへしゃげてゆく。わずか半世紀余り、何をなくし何を生んできたのか。

アーカイブスで見たNHK「新日本紀行」の1シーン。家の前の鉢植えに柄杓で水をやる老婦。さりげない光景を写すカメラは動かない。そのカットの長さに人は目を留め、考え、思う。そこには人本来の時間が流れる。

今の映像は追うのが精いっぱい。何も残らない。それと同じ、町の風景はゆるやかにつながる線を失い、無機的デジタルの点になってゆく。そこに住む人もおのずからデジタル化する。

文句タラタラ、ヒステリー男になった。しかし町を歩けばいい出合いもあり、底に流れる良きものを信じたい気にもなる。おっとりおだやか、豪快も繊細も併せ持つはずの宇和島。

漠然としたやりきれなさは、町の変貌の中で自らも歳をとり、ズレが生じてきたからでもあろう。ちっぽけな個人的ノスタルジー。勝手な杞憂の遠吠え。

（吉田　淳治・画家）


(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。